佳作　（高学年の部）

父の背中

神奈川県　湘南白百合学園小学校　六年

久木田（くきた）　みやの

父と私は毎朝数分だけど二人で話す時間がある。それぞれ通勤通学の駅までの道のりだ。

改札口をぬけてお互いに行ってらっしゃい気をつけてと手をふる。手をふって一歩ふみ出し、一度ふり返るのが私の習慣だ。父は気が付いていない。私は父の背中を見る。ふだん、父の背中は無防備すぎるほどリラックスしている。そんな時は、特段気がかりになることがないか、または駅までの数分で猫の話や友達の事で面白い話だった時。逆にヒリヒリして痛々しげな背中の時もある。それは誰が見ても分かってしまうのではと思うほどだし、かと思えば怒りをおさえているであろうメラメラとしたものが見えてくるような時もある。

私が小さかった頃のアルバムやビデオを見たら、父の背中は若々しく頼りがいがありそうに写っていた。私が大泣きしている時は困り果て、ゲラゲラ大笑いしている時は嬉しくて仕方ないという背中が分かりやすすぎて思わず笑った。

弟が小さかった頃のビデオも見た。不慣れな場所だと不安になり、声のボリュームもおかまいなしに泣きさけんだりにげたりしてしまう弟のことで、父は相当参っていたらしく、いつもはのったりとしている背中なのに、まるで剣山のようにとがってピリピリして、その剣山からはマグマが流れていた。ように見えたのだ。ビデオの映像に残っているので本当のことだ。そんな背中をさらしながらも泣きつかれて眠ってしまった幼い弟をおぶる背中は、父も迷って泣いているようにも見えた。

誰にでも小さい頃は訳も分からず泣くことがあったと思うけれど、父の広くて温かい背中におぶさり、「大丈夫だよ。」と声をかけてもらいながら、幼いながらに心が自然と落ち着いて安心して眠った。父の背中からたくさんの愛情をもらって私も弟も育った。

今朝、いつものように父と改札を通った。ふり返り父の背中を見る。心配げだった背中はもうなく、りんとした清々しい背中だった。数日前まで私には心沈む出来事に胸を痛めていた期間だったがそれは過ぎていた。ずっと黙って見守ってくれていたのだ。おもわず、「ありがとね。いつも、さ。」声に出してみた。父は、えっなに？とふり返ってきた。聞こえてるとは思わなくて焦って「ううん、大丈夫」とだけ応じて段段を下りる。もう大丈夫だよありがとう、お父さん。向こう側のホームで電車を待つ父の背中に、もう一度ありがとうをつぶやいた。